

2025年10月5日 年間第27主日(C年)のミサ 説教の要約

カトリック香里教会主任司祭：林和則

本日のみことばである第一朗読、第二朗読、福音朗読に共通するテーマは「信仰」です。

第一朗読「ハバククの預言 1章2—3節、2章2—4節」

ハバククは紀元前 600 年ごろにユダ王国で活動しました。同時代の預言者にエレミヤがいます。当時のユダ王国はエジプト王国とバビロニア帝国の狭間にあって、国内でも親エジプト派と親バビロニア派に分かれて対立し、王は両派の間を揺れ動くようで、明確な態度を示すことができず、政情は不安定化していました。そのような状況の中で人びとは律法を軽んじ、おのれの保身と利潤の追求のみに生きるようになり、正義は顧みられることなく、不法が横行していました。

そのような社会の中であってハバククは神に向かって「あなたに『不法』と訴えているのに あなたは助けてくださらない(1:2)」と訴えます。

また「暴虐と不法がわたしの前にあり 争いが起こり、いさかいが持ち上がっている(1:3)」現状に怒り、嘆きます。このハバククの時代の「現状」は現代においても現前しているものであると思います。大国の指導者たちの「暴虐と不法」、それによって生じる「紛争、戦争」、国民の「分断」が「持ち上がって」います。けれどもそのような状況にあっても私たちは絶望したり、あきらめたりすることなく、神に向かって訴え、助けを求めて叫びつづけるべきなのです。それが信仰者としてのあるべき姿であるからです。

ハバククが神に「訴え」「呼び求める」のは神への信頼を失っていないからです。もし失ってしまえば、もはや神に向かって訴えも求めもしないでしょう。そして当時の人びとがそうであったように、虚無的になって、この世的な流れに迎合しておのれの利潤追求のみに生きて行くことになったでしょう。

そのようなハバククの信頼に対して、神は「幻を書き記せ(2:2)」と命じられます。神が見せた「幻」は「高慢な者のゆがんだ心」です。神はけっしてそれに目をふさいでいるわけではないと言われているのです。そして「たとえ、遅くなっても、待っておれ(2:3)」と言われます。どんなに遅くなっても「待つ」ことは、「信仰」がなくてはできません。

「待つ」ことは、信仰者にとっては「信仰」が試される「試金石」のようなものであると思えます。

ちなみに十数年のうちに、ユダ王国はバビロニア帝国によって滅ぼされ、「高慢な者」たちは捕囚の地へと引いて行かれました。

第二朗読「使徒パウロのテモテへの手紙二 1 章 6—8、13—14 節」

パウロがこの手紙をテモテに書き送った背景には、テモテが信仰を失いかねないような状況に陥っていたという危機的な状況がありました。テモテはパウロによってエフェソの教会の責任者に任命されました。「わたしが手を置いたことによってあなたに与えられている神の賜物(6 節)」、その「賜物」が「責任者としての使命」であったと考えられます。本日の「聖書と典礼」の 4 頁の注釈 6 には「教会は伝統的にテモテを『司教』と呼んできた」とありますが、この手紙が書かれたと考えられる紀元 60 年代半ばにおいては、「司教職」「司祭職」はまだ教会の中で制定されていませんでしたから、おそらく「長老(ギリシア語でプレビュテロス)職」であったと考えられます。

けれどもエフェソの教会の中で何らかの重大なトラブルが発生して、テモテの長老としての使命の遂行に困難が生じてしまったと考えられています。

そのことはパウロの文面からも察することができます。「再び燃え立たせるように(6 節)」と書かれていますが、裏返せば「今は燃えていない」ということになります。パウロに手を置いてもらうことを通して、聖霊によって任命された長老としての使命に「燃えていた」テモテでしたが、トラブルの発生とそれを解決できないことによって、自信を失い、挫折感の中にあって、使命への熱意は消えつつあったのでしょう。

「福音のためにわたしと共に苦しみを忍んでください(12 節)」という言葉も、苦しむテモテに対して「私も共に苦しんでいる。あなたはひとりじゃない」という思いをこめたパウロの励ましでしょう。

そして「あなたにゆだねられている良いもの(14 節)」は「長老」としての教会の指導職であり、それを「聖霊によって守りなさい(同節)」とその使命を守り続けて行くことをテモテに命じています。

パウロがテモテに長老職、教会を指導することを再び命じるに当たっての大切なポイントは「聖霊によって(同節)」と「神の力に支えられて(8 節)」という言葉です。テモテは長老という使命を遂行するに当たって、どこかで己の力だけに頼っていたのかも知れません。自分に「能力」があることを認められて、「長老」という使命が与えられたのだというような自負心があって、自分の能力によって使命を遂行して行こうとしていたのかも知れません。

それに対してパウロは自分の能力、人間的な考えによってではなく、「神の力」「聖霊」によって使命を果たしなさい、と言っているのです。今、テモテが行き詰まってしまっているのは、自分の力で、自分の思い、考えによって使命を遂行しようとしているからで、それは結局は自分を信じて、神を信じていないという不信仰に陥っているからだ、パウロは暗にテモテを諭しているのです。

神の前にへりくだり、自分の狭い殻に閉じこもることなく、神に自分を開いて

行くならば、道は開けて行くことをパウロはテモテに教えようとしています。
「信仰」とは、「自己」を神の前に開かなければ成立しません。

福音朗読「ルカによる福音 17 章 5—10 節」

本日の福音は 5 節から 6 節までと 7 節から 10 節までとに分けることができます。前半は「信仰」について、後半は「奉仕」について語られていると言ってもよいでしょう。ただ、「信仰」では「桑の木に『抜け出して海に根を降ろせ』(6 節)」というような不可能としか思われない表現、「奉仕」では「命じられたことを果たしたからといって、主人は僕に感謝するだろうか(9 節)」というように神が「冷酷な主人」であるかのような表現に、いささか抵抗を覚えてしまわれる方も多いかと思えます。

実はこのふたつのたとえば、本日の朗読箇所には含まれていない直前の箇所である 17 章 3 節から 4 節までの箇所と関連付けて考えなければ理解できないと思います。ふたつのたとえ話は 3 節から 4 節までの箇所の教えを補っている、と思えるからです。

3 節から 4 節で、イエスは使徒たちに次のように言われます。

「(兄弟が)一日に七回あなたに対して罪を犯しても、七回、『悔い改めます』と言ってあなたのところに来るなら、赦してやりなさい(4 節)」

「七回」というのは「八回目」になれば赦さなくてもかまわない、という意味ではありません。ユダヤ教では「七」は完全数で、いわば「何度でも、完全に赦してやりなさい」と、イエスは使徒たちに命じているのです(並行箇所であるマタイ福音書の 18 章 21 節では、イエスは「七の七十倍までも赦しなさい」と言われています)。

この命令に対して使徒たちは「わたしどもの信仰を増してください(5 節)」とイエスに訴えているのです。これは使徒たちの「悲鳴」のようなものであったのです。「何度でも、終わりなく、人を赦すことなど、無理です!赦すことができるために、私たちの信仰を増してください!」と。

この「悲鳴」に対してイエスは「わずかな信仰があれば、桑の木に『抜け出して海に根を下ろせ』と言え、言うことを聞く」というたとえを話されたのです。

このたとえを先の「赦し」の命令と関連づけるならば、このような不可能な例を持ち出しているのは、「兄弟を際限なく赦すこと」も、この例と同じぐらい困難で不可能に近いということをイエスも理解しているということを示すためではなかったのかと思えます。私たちは、桑の木を容易に抜き取ることができないように、自分に対して犯した兄弟の罪への怒りを自分の心から抜き取ることは容易ではなく、赦すことは困難なのです。

それを理解していながらも、イエスはわずかでも信仰があれば、それが可能に

なると言われているのです。

その「信仰」の内容が7節から8節のたとえ話において示されているのです。キーワードとなるのは次の言葉です。

「しなければならないことをしただけです(10節)」

雨宮慧神父様によれば、この新共同訳では「しなければならないこと」と翻訳されている箇所は、原文のギリシア語を直訳すると「行うべき借りがあること」になるそうです。わかりやすく言い換えれば「返さなければならない借りがあること」であると思います。雨宮神父様はその「借り」は「神から受けた愛」であると書かれています(教友社「主日の聖書解説〈C年〉315頁」)。

その神の愛が完全に啓示されたのがキリストの十字架の死でした。この「十字架」を通して示された神の愛への信仰こそが、「兄弟への赦し」を可能にするのです。

神はキリストの十字架を通して、まったく無償で、無条件に私たちの罪を赦してくださいました。それはただただ、神が私たちを「この上なく愛し抜かれ(ヨハネ 13:1)」てくださっているからです。私たちに一方的にあたえてくださったこの「最上の愛」は、とてつもなく大きな「借り」なのです。

この「借り」を返すために「しなければならないこと」こそが、イエスが最後の晩さんにおいて使徒たちに示された「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい(ヨハネ 15:12)」という掟なのです。

この掟を守り行うために必要不可欠なことこそが「赦し」です。兄弟を「赦す」ことなしに、「愛する」ことはできません。それは「鶏が先か、卵が先かと」という議論と同じように、「愛」と「赦し」は切り離すことのできないものなのです。

この「借り」を返すことは義務のような「重荷」ではありません。キリストの十字架を通して神の愛を信じ、実感すればするほど、感謝が満ちあふれて来て、喜びのうちに「返す」というよりも「応えていこう」とするのです。

神の愛はあまりにも強く、広大無辺であるから、それをわずかでも信仰するだけで、それにたいして応えたいという願いが沸き起こり、隣人への愛、赦しへと向かうことができるというのが、本日の福音のメッセージであると思えます。

兄弟を愛し、赦すためには、キリストの十字架を通して示された神の愛への信仰なくしては不可能なのです。